2020年9月5日　インド大使館　バガヴァッド・ギーター

(事情により協会本部からストリーミング)

・読み：第6章31～40節

・引用：第14章25節、第1章26,27,38節、第11章41節、第5章18節、第6章29節

今日はライブ・ストリーミングとZoomの両方を使ってこの講話をお届けできるようになったことを、協力してくださった信者とボランティアの方々にお礼申し上げます。

Ｑ&Ａのためだけではなく、より密なコミュニケーションが取れると思ったので、Zoomを取り入れました。

この講話はインド大使館で行っていた『バガヴァッド・ギーター』クラスの続きで、7月から始めました。

復習すると、7月のテーマは「サマットヴァム」でした。

心が同じ状態で安定していることですが、同じ状態とは言っても落ち着かない状態ではありません。

普通の我々の心は落ち着かない状態にありますが、サマットヴァムとは落ち着いて、幸せで、静かな心の状態が安定していることです。

『バガヴァッド・ギーター』には、この sameness of mind のアイデアが出てきます。

普通の人の心はあちこち動き回る猿に似ていて、静かな状態にはありません。

「静けさ」はサンスクリットではシャーンタと言いますが、シャーンタがなければシャーンティ(平安・幸福)はありません。**心が静かでなければ平安はありません。**

『バガヴァッド・ギーター』の第2章にも、

***「平安の境地無くして、どうして真の幸福が得られようか」***

*(アシャーンタッシャ クタハ スカム)//2-66*

とあります。

シャーンタの反対に絶えず動いているアシャーンタの象徴が海の波です。

Pacific Oceanは日本語で太平洋と訳されていますが、この太平はサンスクリットにするとシャーンタをより強調したプラシャーンタになります。

協会近くの海を見ると現実は名前と違っていて、プラシャーンタではなくアシャーンタだと思います。名前と実態が違うことはよくあり、インドでもその名前に神の名がつけられている人は多いですが、まったく信仰心がなかったりします。

「サマットヴァムがヨーガの目的である」と『バガヴァッド・ギーター』は教えています。

ニンダー(批判・非難:ninda)とストゥティル(賞賛:stutir)は二つでセットですが、このどちらにも心が動かないことがサマットヴァムであると、7月は説明しました。

8月はマーナ(名誉:mana)とアパマーナ(不名誉:apamana)のどちらにも心が揺らがない事の重要性について説明しました。もう一度14章25節を見てください。

***名誉と不名誉に心動かさず、友と敵を同じように扱い、仕事に対するいかなる野心も捨てた人、以上のような人は、これら三性質を超越した人、と言えよう。//14-25***

サットワ、ラジャス、タマスのトリグナをすべて超越したグナーティータハについて説明しています。プラクリティの影響を超越した人にはどんなしるしがあるのか説明しています。

これは第2章のスティータ・プラッギャー(安定して継続する智慧)と同じことであり、悟った人の状態でもあります。

このことを説明するために、先月はいくつか物語を引用しました。

シュカデーヴァの物語や、シュリ・ラーマクリシュナとギリシュ・チャンドラ・ゴーシュのエピソードを紹介しました。

私が物語を題材にしたのは、眠気覚ましや皆さんを楽しませるためではありません。

年寄りが若者たちに、あるいは母親が自分の子供に面白いお話を話して聞かせるのと、私が物語を引用するのとでは、その目的が違います。

シャンカラチャーリヤに『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』というとても有名な著作があります。ヴィヴェーカは識別という意味であり、ヴェーダーンタについての重要な教えが書かれている聖典です。その中の一説に次の言葉があります。

**「学者たちは沢山言葉を知っていてその言葉で語るが、それを楽しむだけで終わっている」**

一般の我々が食事、景色、音楽を楽しむ(ボーガ)ように、聖典についてもその言葉を表層的な意味で楽しむことも可能ですが、聖典を学ぶ本来の目的は解脱です。

私が物語を引用するのは、ただ単に皆さんの好奇心を刺激して話に耳を傾けさせるだけではなく、そこに書かれている悟った人のしるしを皆さん自身の実践の目標にしてほしいからです。

悟った人のしるしは、まだ悟っていない人、悟りが欲しい人にとっての実現目標です。

『バガヴァッド・ギーター』のグナーティータハ、スティータ・プラッギャーは皆さんに目指してほしい目標であり、ラーマクリシュナの福音、聖書、釈迦などが物語を多く引用するのは教えの本質を強く印象付けて、皆さんにそれを実践してほしいからです。

今日は14章25節のうち、前回のマーナとアパマーナに続いて**友と敵を同じように扱う**ことについて説明します。(ミットラ:友 アリ:敵)

皆さんは友と敵に同じように接することができますか？

もしできるならあなたは悟った人です。

これは他人には判断できず、自分自身でなければ分かりません。内省してみてください。

ある人の体温が平熱より高いかどうか、他人が外から見ても分かりません。

外見上表情は穏やかでも、心が苛立っている人はいます。

「自分の心の中を直接外に表さない人間が文明人である」という教え(teaching of civilization)がありますが、自分だけは本当の心の状態が分かります。

ここで友(ミットラ)に関連して、少しサンスクリットの勉強をします。

『バガヴァッド・ギーター』とは直接関係ないと思うかもしれませんが、これまでも『バガヴァッド・ギーター』の中の言葉から派生して、他の聖典にも勉強を拡大してきました。

過去には『バガヴァッド・ギーター』の中の「ヨーガ・ヤッギャー」というたったひとつの言葉を敷衍して、二年近くパタンジャリ『ヨーガ・スートラ』を勉強しました。

その結果、『パタンジャリ・ヨーガの実践』という本が協会から刊行されるに至りました。

『バガヴァッド・ギーター』の「ヨーガ・ヤッギャー」という言葉は種子であり、それが成長して一冊の本という木になりました。

『バガヴァッド・ギーター』とは直接関係はなくても、ヒンズー教の他の聖典のアイデアを知るのはよいことだと考え、サーンキヤ哲学なども紹介してきました。

さて、ミットラに関してサンスクリットの勉強です。

「友」は訓読みで「とも」、音読みで「ゆう」であり、友達も友人も同じ意味で、外には親友などという言い方もありますが、それほど多くありません。

このことを私は日本語について調べたうえで言っています。

日本語では「友達」はかなり広い意味でつかわれていて、2～3回会って話をしただけの人でも友達と呼ばれます。

インドではその関係の深さに応じて友達の概念は区別されますが、日本語の「友達」はかなり包括的であり、時には祖父と孫ぐらい年齢の離れた二人も友達と呼ばれたりします。

英語ではFriend ひとつであり、せいぜいclose friend,best friendなどそれに形容詞が付いたぐらいです。

ところがサンスクリットでは、その「友」の種類によって4つの表現があり、それぞれニュアンスが異なります。「友」には4つの同義語があります。

・Mitra (ミットラ)

・Bandhu/Bandhava (バーンドゥ/バーンダヴァ)

・Surhid (スーリッド)

・Sakha (サカー)

これらの言葉は辞書に記載されているだけでなく、聖典の中で使われており、『バガヴァッド・ギーター』でも使われています。

先ほどの14章25節では*「友」*としてミットラが使われていましたが、第1章26、27節を見てください。

***そこでプリター妃の息子(アルジュナ)は、祖父を始め、師匠、母方の伯叔父、兄弟、息子、孫、友人、などがいるのを見ました。//1-26***

ここでは*「友人」*を表す言葉としてサキーンス(sakhims)が使われていますが、それはサカーがもとになっています。

***また義父や親交のある人々も両軍の中におり、さまざまな親類縁者が敵味方に分かれ相対峙しているのを、クンティー妃の息子(アルジュナ)は見たのです。//1-27***

*「親交のある人々」*にはスフリダシュ(suhrdas)、*「親類縁者」*にはバンドゥーン(bandhun)が使われています。次は第1章38節を見てください。

***彼等が、貪欲に目が眩み、一族を殺したり、友人を傷つけたりすることに、たとえ疚しさを感じなかったとしても、//1-38***

*「友人」*にはミットラが使われています。

私は今この「友」の4つの同義語を、辞書からではなく『バガヴァッド・ギーター』から引用して説明しています。

ではクリシュナとアルジュナの友人関係は、どの言葉で表されるのでしょうか？

サカーです。第11章41節を見てください。

***あなた様のこの偉大さを知らず、うかつにも親しみの余り、ただの友人と思いこんで、私は、あなた様のことを「クリシュナとか、ヤーダヴァとか、友よ」などと無遠慮に呼んでおりました。//11-41***

サケ-ティ(sakha+iti)で友を表しています。

この節の前にクリシュナは神である自分の宇宙的な姿を現しており、それを目撃したアルジュナはそれまでシュリ・クリシュナに対して自分と同等の友人のように振舞ってきたことを後悔したのです。

クリシュナをからかったり冗談を言ったり、クリシュナのいないところで他人に彼のことを話したりしたことを後悔して、アルジュナは何度もシュリ・クリシュナに詫びました。

この時のアルジュナの驚きは、シュリ・クリシュナの母ヤショダーが感じたものと同じだったかもしれません。

いたずらっ子の幼児クリシュナが土の塊を口に入れたので、それを無理やり吐き出させようとして我が子の口をこじ開けた母ヤショダーは、その口の中に全宇宙を見ました。

そしてその宇宙の中にはヤショダー自身も存在しているのを見ました。

もしこのことをずっと覚えていたら、ヤショダーはクリシュナを神とみなし我が子とは思えなくなってしまいますが、クリシュナはマーヤーの力を使い母の記憶を消し去ったので、ヤショダーはその後もクリシュナを我が子として扱い、一緒に遊びました。

ある時は自分の姿を見せておいて次の瞬間にはそれを忘れさせる、神の遊びは面白いです。

シュリ・ラーマクリシュナもその本当の姿を見た直弟子に対して、「私を神としてあがめるのではなく最も近い身内として接するように」と言いました。

ホーリー・マザーもその信者に、「私のことを神ではなく、内のお母さんと思うように」と言いました。

相手を神だと思ってしまうと、自分が何か罪を犯しはしないかと緊張して、普通の状態で接することができなくなります。

それでは神が人間の姿をとって現れても、人々を教え導くことができなくなってしまいます。

神の化身と信者はとても親しい親族のように交流するのが理想です。

さて「友」を表す4つの同義語のニュアンスがどのように違うのか、これから説明します。

ある讃歌の中にも「友」を表す言葉が出てきます。*(スワミが朗唱する)*

今の讃歌の中では「神は我が友」と歌われていますが、バーンドゥとサカーが使われています。

**・ミットラ**

二人の人間の心が一緒である時、彼らはミットラであると言えます。

心が一緒とは考えが同じであるということです。

二人の言葉が一緒、行いが一緒である時、彼らはミットラです。

余談ですが、Mitraには「友」の他に「太陽」という意味もあります。

シャーンティ・マントラ(平安のマントラ)に出てくるミットラは、太陽のことです。

**・バーンドゥ/バーンダヴァ**

ベンガルではこの言葉はよく使われます。

喜び(スカム)あるいは苦しみ(ドゥフカ)、その他どんな状態にあっても二人の間の愛の糸が緩まず強靭であるなら、彼らはバーンドゥです。

また二人の人間が離れることができないなら、二人はバーンドゥです。

祭り、娯楽、飢饉、革命、王宮、火葬場、さまざまな別々な場所でもいつも一緒に居合わせるような二人はバーンドゥです。

ここで火葬場とは二人とも一緒に焼かれて同じ天国に行くということではなく、共通の親しい知り合いの葬儀に参列するという意味です。

**・スーリッド**

ある人がもう一人の人間のwell-being(幸福)について絶えず考え、考えるだけでなくそれが実現するように行動するなら、そのような関係の二人はスーリッドです。

**・サカー**

年齢も同じ、好きなものも同じ、考えも同じで、絶えず一緒に行動し、付き合いがあるなら彼らはサカーです。**シュリ・クリシュナとアルジュナはこの意味での友人です。**

このように友人を表す4つの表現からもわかるように、サンスクリットはとても深く豊かな言語です。皆さんもサンスクリットを勉強してください。

欧米人でもサンスクリットが大好きな人たちがいます。

第14章の25節に戻りますが、友(ミットラ)も敵(アリ)も同じように扱うことが今日のテーマです。ところで友については分かりますが、誰が自分の敵であるか皆さんは分かりますか？

敵のほうからあなたに対して、「自分はあなたの敵である」と言ってくることは稀です。

ある人があなたの前ではそのそぶりを見せなくても、陰であなたを傷つけたり、あなたに関して嘘を言いふらしたりしていると、人づてに聞くことはあり得ます。

そして確認した結果、それが本当だったと知ることはイメージできると思います。

あなたがずっと信じていた人が長期間にわたってあなたを傷つけていた、ということはあり得ます。それは金銭の面でもあり得ますし、あなたを傷つけていた人があなたの親類の中にいたということだってなくはありません。

誰が自分の敵であるか、我々は時には直接的に、また時には間接的に知ります。

それではある人が自分の敵であることが分かった後、皆さんのふるまいはどうなりますか？

参加者：その人を避けて離れるようにする

それだけで済むでしょうか？　その相手に対して復讐してやろうとはなりませんか？

もちろん関係を完全に断ったうえでのことですが、復讐することも考えるはずです。

相手の顔も見たくないのでまずは関係を断ち、次には相手を非難し、自分の力で足りなければ時には神に祈っても復讐しようとします。

今はサマットヴァム、グナーティータハ、スティータ・プラッギャーがテーマなので、悟った人と普通の人がどれほど違うのかの説明のため、敵に対する態度について取り上げています。

さて、基本的な質問です。

悟った人にとって敵はあり得ますか？　友はあるかもしれませんが敵は存在しますか？

**悟った人から見ると敵というものは存在し得ない**のですが、それはなぜですか？

参加者:相手の存在も自分と同じだから

どう「同じ」なのですか？　「自分も人間、相手も人間」という意味ですか？

参加者:相手の中にも自分の中にいるのと同じ神が存在するから

間違いではありませんが、もう少し根本的な考え方は**「自分の魂(アートマン)と同じ魂がすべての人の中に存在するから、敵というものはあり得ない」**です。

第5章18節を見てください。

***真理に関する知識と謙虚な心を有する賢者は、僧侶も、牛も、象も、犬も、犬食いも、一切差別することなく、すべてを平等に観る。//5-18***

*「平等に観る」*はサマ・ダルシナハの翻訳ですが、これはサマットヴァムのサマと同じです。

ここで僧侶(ブラフマネー)は最上位のカーストというだけではなく、聖典を学んだ清らかな人の象徴です。*「犬食い」*は火葬場の仕事をするチャンダールのことで、彼らは犬の肉を食べます。

これらすべてを平等に観ることができるのは、すべての人、ものの中に同じアートマンが存在することを知っている人です。第6章29節を見てください。

***また本当に真理を覚り、あらゆるものを******同等に観るヨーギーは、万物の中に自己を見、自己の中に万物を見る。//6-29***

ここにも*「同等に観る」*(サマ・ダルシャナハ)が出てきます。

**「すべてのものの中に同じ魂がありそれは自分の魂でもある」**という考え方です。

バクティ・ヨーガは神という視点からものごとをとらえますが、ギャーナ・ヨーガはすべての人とものの中にあるアートマンを考えます。

アートマン(魂/内なる自己)は遍在していて、人、動物、物質、自然すべての中にあります。

このことを悟った人がいたなら、彼にとって敵というものが存在することはあり得ません。

『バガヴァッド・ギーター』になぜ友と敵のことが書かれているのかと言えば、悟った人にとって敵はいなくても、その悟った人の信者にとっては敵が存在するからです。

信者や弟子たちにとって、自分のグルを批判する人は敵です。

聖者カビールの信者たちは師に対して、「〇〇は先生を批判しています」ということが多かったのですが、カビール自身は気に留めませんでした。

その批判者が亡くなった時弟子たちは大いに喜びましたが、カビールは「私の洗濯屋さんがいなくなってしまった」と嘆き悲しみました。

カビールにとって批判者とは、自分の間違いを気づかせてくれて、自分の中の汚れを洗って落としてくれる存在だったのです。弟子たちとカビールでは見方が正反対なのです。

スワミ・ヴィヴェーカーナンダのエピソードを紹介します。

スワミの時代、インドには西洋から多くの宣教師が派遣されていました。

彼等の大義はヒンズー教という遅れた宗教の迷妄にとらわれたインドの人々を、無知の暗闇から目覚めさせてキリスト教に改宗させることであり、それに賛同する人たちからたくさんの寄付を集めていました。

シカゴの宗教会議の後スワミジは一躍有名になり、これほどの人物を生み出したヒンズー教が遅れた宗教などであるはずはないと皆が考えるようになり、寄付が集まらなくなってきました。このことを快く思わなかった狂信的な人たちは、スワミジの人柄についての嘘をいいふらし誹謗中傷しました。ある時スワミジはディナーに招かれました。

ディナーの最後にコーヒーが提供されましたが、スワミジは直感的にそれを飲むことを躊躇しました。そしてスワミジの眼前にシュリ・ラーマクリシュナのヴィジョンが現れ、「ナレン、そのコーヒーには毒が入っている。飲むのはやめなさい」とアドバイスをし、スワミジはそれによって護られ難を免れました。

普通の人間ならこのことに激怒し、弁護士を雇い裁判沙汰にするかもしれませんが、スワミジは黙ってこのことを無視しました。

スワミジは自分を傷つけようとした人に対して復讐しようとはしませんでした。

善人であろうと悪人であろうと、信者であろうと世俗的な人間であろうと、すべての人の中に自分と同じ魂があり、また自分の中にも他の人間と同じ魂があると考えて区別しない、これがサマットヴァムです。

前回は名誉と不名誉について、今回は友と敵についてサマットヴァムとは何であるかを説明しました。

Ｑ＆Ａ

最後に少し捕捉します。

ホーリー・マザーは常々信者に対して、

「あなたを傷つける人がいても、復讐しようと考えてはいけません。そのことで神様に文句を言うのもいけません。その人のために神様に祈ってください」

と言いました。

イエスの磔の時の最後の祈りも、「神よ、彼らは自分がどんなにひどいことをしているのか知らないのです。彼らを許してください」でした。

友と敵に対して「同じである」(トゥーリヤ：tulya)よりもさらに高い、自分に敵対する人をも変化させようとする聖者の考え方です。

叙事詩『ラーマーヤナ』の作者ヴァールミキはもともと泥棒でした。

自分の家族を養い生計を立てるため、旅行者を殺し金品を奪っていました。

聖者ナーラダもそのことは知っていましたが、恐れることなくヴィーナを弾きハリの名を唱えながらラットナーカ(ヴァールミキの本名)のいる森に入りました。

いつものようにラットナーカはナーラダを殺そうとしましたが、その時ナーラダが、「私を殺すのは構わないが、あなたはこれまだ散々罪を犯している。そのことで間違いなく地獄に落ちると思うが、そのことを考えたことがあるか」と尋ねました。

ラットナーカは、「俺は家族を養うために強盗をしているので、養っている家族が俺の罪を分かち合ってくれる」と答えました。ナーラダは「本当にそうしてくれるのかどうか、家族に確かめたらどうか？　私が逃げ出す恐れがあるというなら私を紐で木に括り付けてから家に戻ればよい」と言いました。ラットナーカは言われたとおりにして家に戻り、まずは母親に尋ねました。母親の答えは、「息子であるお前がどんな方法で私を養っているのか、私には関係ない。罪を分け合うのは嫌だ」でした。同じことを妻に聞くと、「妻を養うのは夫の仕事であり、その方法が道徳的か非道徳的か私は知らない。罪を分け合うのは嫌だ」であり、息子たちの答えも同じでした。これを聞いたラットナーカは大変なショックを受け、森に戻って聖者ナーラダに自分はどうしたらよいのかと尋ねました。ナーラダは「ラーマ神の名前を繰り返し唱えるように」とアドバイスしました。これまでに犯した罪があまりに重かったので、最初ラットナーカはラーマ神の名前をうまく発音できませんでした。「ラーマラーマ」と言うべきところ、「マーラマーラ」になってしまいました。しかしあきらめずに何年も繰り返し唱え続けているうちに、「ラ」と「マ」がつながり、逆転し、ついには「ラーマラーマ」と唱えられるようになりました。こうしてラットナーカは聖者ヴァールミキとなりました。

聖者ナーラダは悟っているだけでなく、慈悲心があり罪びとでも避けることはしなかったのです。

参加者：

私も普通の人と同じで、批判されるといい気持ちはしません。マハラジに怒られるとその時はドキッとしますが、結果的には良かったので「心の洗濯」になったと感謝しています。「文明の教えでは顔には心の状態を出してはいけない」という説明がありましたが、この文明の教えは聖典の教えから見て正しいのですか？

文明の教えに従うことが、その人にとって見せかけの振る舞いになってはいないか、注意する必要があります。

自分の心中では快く思っていないのに口先では親しい友人のような言葉を交わすのは、その人の精神衛生上もよくありません。そうならないように気をつけましょう。

一番良いのは誰に対しても同じような慈悲心を持ち、他者のために祈ることです。